

爽風そよぐ 避暑地、強羅へ

箱根観光の交通の要所として多くの旅行者が訪れる強羅。大正期には別荘地として栄え、夏の風物詩「大文字焼」とともに発展してきた歴史ある街だ。そんな強羅の歩みを振り返り、往時に思いを馳せる避暑の旅を楽しんでみたい。



松明点火後も、周囲の草木に移った炎をはたく火消しや、松明の上下を入れ替える危険な作業が続けられる。



箱根登山鉄道の創業間もないころの祭り光景。線路沿いの道を埋め尽くさんばかりのにぎわいだった。(写真：箱根強羅 島写真館)

九十数年の歴史を刻む送り火

仕掛け花火、スターマインの迫力にも引けを取らぬ存在感の大文字焼。「大」の一画目の「一」の長さは108m、太さは7.2m。



箱根登山ケーブルカーの現在の車両(4代目)。スイスのガングロフ社で製造され、平成7(1995)年に登場した。



レトロな車両が行きかう開業当時のケーブルカー。料金は25銭。約10分の所要時間は、今も昔も変わらない。



開業当時の上強羅駅(現 早雲山駅)。屋根や窓に曲線を取り入れた、優美な印象の駅舎であった。

早雲山の北東斜面に位置する、坂と温泉の街、強羅。正面に仰ぎ見るのは、箱根外輪山の一つ、標高924mの明星ヶ岳^{みょうせうがけ}。8月16日の夜、山肌を焦がすように赤々と浮かび上がる大文字焼は、箱根の夏を代表する風物詩だ。

始まりは、箱根湯本と強羅間に箱根登山鉄道が開通した、大正8(1919)年。避暑客の慰安と、うら盆の送り火を兼ねて考案され、今年で96回目となる。山の中腹に赤々と浮かぶ「大」の字をバックに、2000発もの大輪の花火が打ち上がる様は、まさに圧巻。その影で黙々と汗を流し、大文字焼を支えているのは、地元宮城野の青年会。2カ月前から休日返上で準備にあたり、当日は、灼熱の炎と熱風を浴びながら、急斜面に立てられた250本もの松明に点火。炎の点が線になり、漆黒の闇に幻想的な「大」の文字を浮かび上がらせていく。

早雲山を力強く登攀する、箱根登山ケーブルカーも、大正10(1921)年冬に開業した強羅のシンボル。傾斜地に立つ別荘や温泉宿の、日常の足^{あし}を考え、当時は大変珍しい4つの中間駅が設けられ、今日に至る。実際に歩くと痛感するが、早雲山に続く斜面は思いのほか急で、少し歩くだけでも息が切れる。この開通が、どれほど多くの人に喜ばれたかと思いつつケーブルカーに乗るのも、感慨深いものがある。



大正6(1917)年の箱根強羅公園。噴水池の下方にはプールもあったという。公園全体の設計・監督は、当時の造園の大家とされた一色七五郎が手がけた。



箱根登山鉄道と箱根登山ケーブルカーの中継地点、強羅駅。スイスをイメージした山小屋風の駅舎は、昭和52(1977)年に完成。



開業当時の強羅駅。よく見ると、屋根の形や屋根の小窓、ひさしなど、現在の駅と非常に似ていることに気づく。



昔も今も変わらない憩いのオアシス、箱根強羅公園の現在の噴水池。雄大な明星ヶ岳を一望できる。箱根強羅公園/0460-82-2825 神奈川県足柄下郡箱根町強羅1300

巨石転がる荒野から避暑地に

地盤が亀の甲羅のよう、大きな岩がゴロゴロ、そんなところから地名がつけられたという強羅。

今でこそ、ホテルや土産物店などでにぎわう強羅だが、かつては山桜などの灌木や山百合などが生い茂る雑林地帯、そこかしこに巨岩が転がる荒地だった。明治中期、変遷する4人の土地所有者が心血を注いで開発の黎明期を築き、登山電車とケーブルカーの敷設を計画していた小田原電気鉄道(現 箱根登山鉄道)が開発を引き継いだのは、明治44(1911)年。街の中心には西欧風の公園を、その周囲に碁盤目状の別荘地を整え、西欧風の街並みを造り上げた。当時の政財界人らが過ごした、瀟洒な避暑地の面影を残す風情ある街の佇まいは、今も多くの人々に愛されている。松本清張の小説『箱根心中』には、昭和13(1938)年、強羅駅前が開業した強羅ホテル(平成10年に閉館)も描かれている。

大正3(1914)年、街の中心に整備された公園こそが、箱根強羅公園だ。園路脇など、随所に巨岩・奇岩が配され、噴水池を中心とする左右対称の構造、石組の正門など、100年前から変わらない姿が保たれている。それらが評価され、平成25年には国登録記念物に指定された。園内の一角には、街の開発に大きく貢献した財界人で、近代三大茶人の一人、益田孝が設けた貴重な茶室「白雲洞」も残る。箱根強羅公園を訪れた折には、ぜひ見学をおすすめしたい。



茶人でもあった益田孝が設けた「白雲洞」。点茶を楽しみ、巨岩を彫りこんだ岩風呂なども見学できる。



箱根強羅公園内の一角、「Café Pic」。テラス席からは噴水や美しい山々が望める。右写真は開業当時の様子。

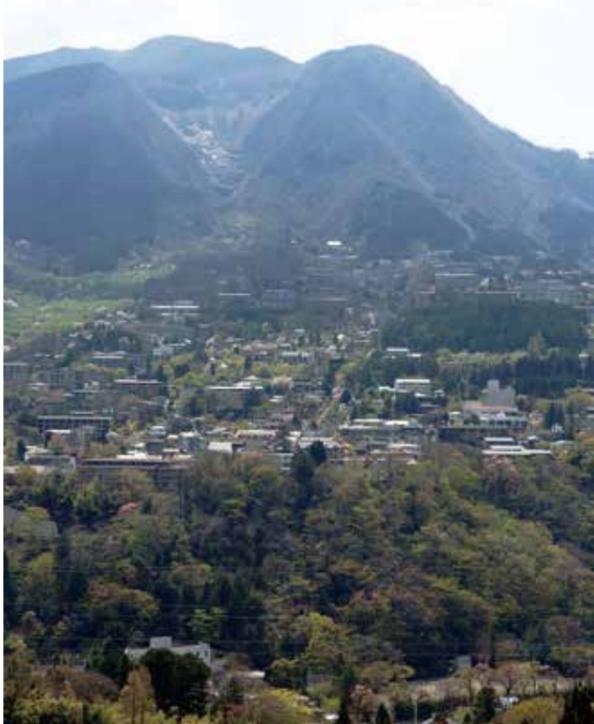




「懐石料理 花壇」の室内は、モダンなアールデコ様式。大きな窓からは建設当時から茂る豊かな木々も望める。



旧宮家の洋館で、高級旅館「強羅花壇」が営む「懐石料理 花壇」。壁面に柱や梁を露出させた、ハーフティンパースタイルの外観が印象的。
懐石料理 花壇 / 0460-82-3333
神奈川県足柄下郡箱根町強羅1300



写真中ほどの強羅駅から一直線に伸びるケーブル線の両脇に、碁盤目状の区画が広がる。前方は神山、冠ヶ岳、早雲山の山並み。山間には大涌谷が。

問い合わせ／箱根強羅観光協会 0460-82-2300 <http://goura-kanko.jp>
写真提供／箱根登山鉄道、箱根強羅観光協会

強羅の巨石を配す名勝地



久しく通常非公開とされてきた「石楽園」。多くの要望に応え、昨年からの優美な庭園を散策できるようになった。
箱根美術館 / 0460-82-2623 神奈川県足柄下郡箱根町強羅1300



神仙郷内、苔の種類が多きでは日本有数と言われている「苔庭」(上)。明星ヶ岳などの山々を望む、数寄屋建築の観山亭は昭和期の著名な建築家、吉田五十八の設計で増築されている(下)。

遠く相模湾や房総半島まで一望できる。別荘地として栄えた時代を彷彿とさせる瀟洒な洋館で、季節の懐石を楽しめるのは、「懐石料理 花壇」。江戸期に創られた由緒ある四宮家の一つ、閑院宮家の載仁親王が、昭和3(1928)年に三菱創始者・岩崎家の強羅の別荘に滞在。この地を大変好まれ、2年後にこの別邸を建て、晩さん会も催したという。戦後に皇籍を離れ、後を継ぐ男子がなく家名が途絶えた旧宮家。ありし日の姿を伝える貴重な空間で味わう料理は、より深く濃く、心に刻まれるに違いない。

箱根強羅公園とともに、名勝地として国登録記念物に認定された箱根美術館。開館は昭和27年、箱根で最も歴史のある美術館だ。美術館が立つ庭園「神仙郷」は、創立者の岡田茂吉が一木一草一石にこだわり、理想郷として自ら設計・造営したもの。昭和19(1944)年、実業家・藤山雷太の別邸や周囲の土地を譲り受け、自然と人工の調和を図りながら、昭和28(1953)年に現在の形に整えた。通りに面した石垣の石や園内随所に配された巨石・奇岩は、すべてこの土地にもとからあったもの。宮城野萩が見事な「萩の道」の傍らには、小田原電気鉄道(現在の箱根登山鉄道)所有の和式庭園内にあった貸別荘を移築した「萩の家」も。庭園中央に設けた「石楽園」は、巨石とせせらぎに日本家屋が調和。空気が澄んで晴れた日には、明神ヶ岳や明星ヶ岳などを借景に、